

いえで
が あ さん の 家 出

いながき がん＝作 わたなべ あきお＝絵



■著者紹介 いながき がん

1928年三重県に生まれる。現在三重県多度町多度南小学校教頭。中部児童文学会所属。作品に『イキイキゴンボのうた』『女人堤防』『弥十じいさんの白い馬』ほか多数。

*現任所＝〒511-01

三重県桑名郡多度町北猪飼38-1

■画家紹介 渡辺安芸夫

1949年福島県三春町に生まれる。フォルム洋画研究所で学び、油彩画の制作をしながら出版物のさし絵、絵本などを描いている。児童出版美術家連盟会員。

児童図書のさし絵に『はやくこいこいランドセル』『とうさんのうれしいこと』ほか多数。

*現任所＝〒181 三鷹市大沢6-12-6

913

いながき かん

かあさんの家出

国土社 1983

72P 23×19cm (国土社の童話文庫4)

かあさんの家出

〈国土社の童話文庫4〉

著 者 いながき がん © 1983

1983年6月5日 初版第1刷印刷

1983年6月10日 初版第1刷発行

発行者 長 宗 泰 造

印刷所 厚 徳 社

発行所 国 土 社

〒112 東京都文京区目白台1丁目17-6

電話 東京943-3721／振替 東京6-90631

落丁・乱丁の本はお取りかえします。〈検印廃止〉

ISBN4-337-05504-5

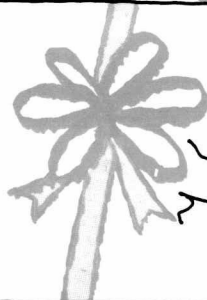
かあさんの家出

作＝いながき がん★絵＝わたなべ あきお

もくじ

どうしても書けない手紙.....4

かあさんいない母の日.....17



ういんぷにが
アハガハガ



いやなさんかんじゅぎょう……
39

かあさんがえってきたけれど……
52

三年三組
すずき
ゆうすけ

I どうしても書けない手紙

三時間めは 作文でした。

三年三組、うけもちの 吉川^{よしかわ}みち子先生は、きょうだんの前に 立つと、

「図工につづいて この時間も おかあさんのことを 勉強^{べんきょう}します。あしたは 母の日ですからね。」
と いいました。

うしろの けいじ板^{ばん}のはしつこで おこった顔を しているのは、前の時間に書いた ヨウくんの かあさんの絵です。
やさしい顔になるようにと いっしょうけんめい 書いたのですが、かあさんのことを 思っていたら そうなってしまう
した。



——また、かあさんのことか、いややなあ。——

と ヨウくんは 思いました。

まどぎわの セイジくんが 大声で、

「先生、いややあ。」

と いいました。

「ぼくも いややあ。」

と タイチくんが つづいて いいました。

ヨウくんは ふたりの声を きいて 首を ふりました。

——タイチくんたちとは ちがうんだ。——

と 心の中で つぶやきました。

「先生、おかあさんの なにを 書くのー。」

ハルオくんが えんぴつを ふりあげました。

となりのせきの ハッちゃんか すくつと 立ちました。

「先生、あしたは 母の日でしょう。それでね。わたし、ため

たおこづかいで おかあさんのエプロン 買ってあげるの。カーネーションの花と いっしょに プレゼントするのよ。」

と、三つあみの ポニーテールを ふって しゃべりました。

ヨウくんは ほしいに しわを よせました。とくいになつて しゃべる ハツちゃんの声を きくと、むかむかしてきます。

先生も 口を への字に まげました。それは、先生の 話ができないからです。

「ちよっと まって、先生はね、おかあさんに かんしゃの気もちを こめた 手紙を 書いてもらいたいの。」

声を 大きくして いいました。

「そんなの いややいうのに——。」

タイチくんが こんどは 両手を 大きく ふりました。

「そんなことを いってでは だめ、お手紙を 書くのは だ

いじな勉強^{へんきょう}なんだから。」

先生は おこったような目を タイチくん^{たいちくん}に むけてから、黒板^{こくばん}に、

『おかあさん ありがとう』

と 書きました。

それを見て ヨウくんは 顔を ゆがめました。

かあさんに 手紙を書くなんて こまるんです。 “ありがとう”なんて 気もち^{きもち}は ちっとも わいてきません。

首をまわすと エツくん^{えつくん}が 見えました。 エツくんは えんぴつを 口にくわえていました。

先生が つくえのあいだを とおりぬけました。 エツくんのそばに よって、

「エツくんはね、おばあさんに 書けばいいのよ。」
と やさしくいいました。



エツくんには おかあさんが ありません。交通事故で なくなつて、もう 一年以上になります。それから、おばあさんが おかあさんのかわりを しています。

エツくんが えんぴつを 口から はなしました。

ヨウくんも えんぴつをとつて つくえの上の 紙を ひろげました。

『ぼくの かあさんは……。』
と 書きだしました。

でも その つづきが 書けません。えんぴつのしんを 紙につけたまま うつぶしました。目を つぶりました。

かあさんと、とうさんの顔が うかびました。どちらも かわいい顔で にらみあっています。

それが もう 一か月も つづいているのです。

三日前の朝は　たいへんでした。

はげしい　いいあいの声に　おどろいて　ねどこを　はいだ
していくと、まだ、外は　まっくらだというのに、かあさんは
ユウコをおぶって　げんかんさきに　つつ立っていたのです。
大きなふろしきづつみを　さげてです。

顔が　青ざめていました。ほおが　ぴくぴく　ふるえていま
した。

「ヨウイチ　どうする！　かあさんに　ついていくのか　いか
ないのか。」

いきなり　かん高い声で　そういわれて、とまどいました。

どうすると　いったって、とうさんも　かあさんも　ぼくの
とうさん　かあさんだから　こまります。ただ　おろおろする
ばかりで、なにも　いえませんでした。

「もう　ぜったいに　かえってやらないから。」

かあさんは　とうさんにむかって　なきしゃべりして、家から　出ていってしまいました。

しきいをまたいで　つつ立っていた　とうさんが　ヨウくん
にちかづきました。ヨウくんのわきを　かかえて、自分のねど
こへ　つれていきました。

「いきたければ　どこへなと　いけばええのや。なあ、ヨウイ
チ。ヨウイチは　男の子や、とうさんの子や。」

とうさんの　酒さけくさい息いきが　ふるえていました。

やがて、朝の光が　さしてきました。

かあさんいない　とうさんは、まないたで　しるの実みを　き
ざんでいました。

「ヨウイチ。もうじき　できるからな。」

と　いって　ふりむいた　とうさんの　あごひげの　つぶつぶ
が　くつきりういて　見えました。



口をとがらせた かあさんの 横顔よこがおが その上にかさなって
ぼやけて 消きえていきました。

「ヨウくん。このごろ 元気がないね。どうかしたの？」
頭の上で 先生の声が しましたが、ヨウくんは うす目を
あけただけでした。

チャイムが になりました。

「先生。書けたら どうするの。」

ハッちゃんの 高い声が きこえました。

「書けた人はね、ここへ 出してちょうだい。かえりに リボ
ンをかけた ふうとうにいれて くばりますからね。」

先生の声が 教室のすみの方へ うつつていきました。

ヨウくんも そろそろと 顔をあげました。

みんなが 書いた作文を 持もって、先生のところへ おしか

けています。

ヨウくんは　しかたなく、えんぴつを　わしづかみにすると、
『かあさんは……』と　書きかけた下に、『どこへ……』と
書きたしました。が、あとは　どうしても　書けません。書いた
字の上に　なん本も　線せんをひいて　消けしてしまいました。

“ポシッ”と　音を立てて　えんぴつのしんが　とんでいきま
した。

「いいですか、よくきいてね。みんなの書いた　おかあさんへ
の手紙。こうして　きれいなリボンを　かけました。あした
おかあさんに　さしあげてね。お手つだいも　わすれないでね。
月よう日の　さんかんじゆぎようには、母の日に　どんなこと
をしたか　お話してもらいますからね。」

かえりの会の時、先生が　そういつて、赤いリボンをかけた
白いふうとうを　くばりました。